

さあパーティーの準備を始めよう！

奨励	栗原 宏介〔くりばら・こうすけ〕
奨励者紹介	日本キリスト教団奈良教会牧師 同志社大学キリスト教文化センター非常勤嘱託職員 同志社大学神学部嘱託講師

万軍の主はこの山で祝宴を開き
すべての民に良い肉と古い酒を供される。
それは脂肪に富む良い肉とえり抜きの酒。
主はこの山で
すべての民の顔を包んでいた布と
すべての国を覆っていた布を滅ぼし
死を永久に滅ぼしてください。
主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい
御自分の民の恥を
地上からぬぐい去ってください。
これは主が語られたことである。
その日には、人は言う。
見よ、この方こそわたしたちの神。
わたしたちは待ち望んでいた。
この方がわたしたちを救ってください。
この方こそわたしたちが待ち望んでいた主。
その救いを祝って喜び躍ろう。

(イザヤ書 25章6―9節)

イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。
その名はインマヌエルと呼ばれる。」
この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ、男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった。そして、その子をイエスと名付けた。

(マタイによる福音書 1章18―25節)

主を待ち望むアドベント

皆さん、おはようございます。
キリスト教会の暦ではアドベントが1年の始まりとなっています。クリスマスを起点として考えた場合、準備の期間であるアドベントから1年が始まるという考え方なのです。私も1年の始めのこの時期に、教会で着ているガウンをクリーニングに出します。10年着ているので傷みも激しかったため、今年はメンテナンスに出して、ほころびなどを直しました。
アドベントには私もそのようにして準備をし、心清らかにしてクリスマスを迎えようとしています。アドベントというのは「到来する」という意味の言葉であり、その意義は「待ち望む」というところにあります。この期間、どのように過ごすかと言えば、私たちは主イエス・キリストの誕生を待ち望む期間、その準備の期間として過ごします。準備の期間の典礼色は紫で、祈りの色であったり、悔い改めや顧みるといった意味をもつ色になります。このアドベントは、ひと月の間続きますが、イエス・キリストの誕生を喜び祝うために、あるいは私たちのもとに迎えるために、しっかりと備え、待ち望むというのがテーマの期間となります。
では私たちは、このアドベントに何を待つのでしょうか。誰を待つのでしょうか。そう、それはイエス・キリストその人です。降誕を待ちわび、喜び祝うために準備する、備えの期間です。12月25日がイエスの誕生日であるという聖書的な根拠はどこにもありません。正確に言えば、イエス・キリストの誕生を記念する日がクリスマスで、イエス・キリストの誕生日というわけではありません。私たちはちゃんとその意義を考えるべきだと思います。誕生日だからお祝いしようというわけではないのです。誕生を記念するところに意義があります。

クリスマスは恋人と？

ここでちょっと考えてみたいのですが、私の授業で、毎年必ず特に秋学期にこのようなコメントがあります。「クリスマスまでに恋人がほしいです。どうしたらいいですか」というものです。男の子も女の子も同じコメントを寄せてくるので「くっついたらいいのに」と思いますが、名前を明かすことはできないので「はい、カップル成立」というわけにはいきません。昨日のコメントのなかには、切羽詰っているのでしょうか、「クリスマス、やめにしませんか」というものがありました。いやいや、そうではないだろう。クリスマスに恋人と過ごさなければいけないという感覚こそやめにしないといけないのではないのでしょうか。でも「クリスマス、やめにしませんか」というのは、そのあたりを象徴的に言っている日本的な面白いコメントだと思って読みました。それに付随して面白いコメントがいろいろあり、「去年はバイトをしていました。その前もバイトをしていました。今年もバイトのシフトです。私はいつまでバイトをすればいいんですか」と書いてありました。私は牧師である以上、一生「仕事」です。仕事なのです。これを平気で教会でも言ってしまうので「嫌々、やっているんですか」と教会の人に聞かれるのです。そうではありません。喜んでやっていますけれども、やはり「ああ、メサイアのコンサート行きたい」とか「どこか他の教会の礼拝に参加してクリスマス気分を味わいたい」「ディナーとか豪華に食べてみたい」という欲求はありますという話はします。

クリスマスイブに

毎年私の奈良教会では、夜の7時からイブの燭火礼拝を行っています。それが終わったら、幸いにも深夜礼拝はないので、近所の深夜礼拝をやっている教会に足を運びます。司祭さんたちは「同業者」がいるとやりにくいだろうと思うのですが……。そして聖餐式で回ってくると、あたかも今気づいたかのように、「あ、先生」と言って司祭さんから握手されるのです。毎年恒例のやりとりです。12時ぐらいに礼拝が終わっても私は家に帰らず、その足で新しい出会いを求めてバーに向かいます。酒ばかり飲んでと言われるのですが、聖書的な根拠があります。
聖書には、こんなことが書いてありました。「万軍の主はこの山で祝宴を開き／すべての民に良い肉と古い酒を供される。それは脂肪に富む良い肉とえり抜きの酒」。私は安酒を飲んでいますが、喜びのとき、祝宴のときには、このようにして良い肉とえり抜きの酒が供されると書いてあるのです。だから私も一人でクリスマス気分を味わうために、これを実践するのです。神様から与えられた豊かな時だということで、そうした所に足を運んで何をしているかということ、ただ飲んでいるだけではありません。ちゃんと宣教しているのです。「牧師さんが、イブにこんな所にいいんですか」とお店の人にもお客さんにも心配されます。これがポイントなのです。そこでちゃんと宣教してお話をしたり、いろいろな人と出会って、そこでいろいろな話をし、その人のことを知り、あるいは知ってもらいながら、そこで新しい歩みがなされていく。あわよくば、教会に来てほしいという気持ちをもちながら、知ってもらうという活動をしています。完全に言い訳じみっていますが、教会の創立記念のチラシも作って、奈良市内のいろいろな居酒屋さんに貼ってもらいました。ちゃんと居酒屋伝道をしているのです。
イエスも「見る、大食漢で大酒のみだ」と悪口を言われるぐらい、そういったことが好きだったと思っています。みんなで楽しく食卓を囲むことを大事にされた方でした。一人寂しく地面に座っている人がいると、通りすぎることなく、足を止めて、名前を呼びかけ、そして「一緒にごはん、食べようよ」と誘われたのがイエスです。そして共に食卓を囲みました。そんな様子を見て人びとは言います。「あいつは罪びとたちと食卓を共にしている。なんて奴だ」と悪口を言われます。しかしイエスは食卓を共にされることに重きを置きました。同じ釜の飯を食うことによって家族となりました。そのことを大切なこととしました。イブの夜、一人で寂しくお酒を飲んでいる人たちに声をかけること、まさにそれはここで語られるイエスの愛のわざだと思っていましたけれども、去年は違いました。私が一人でお酒を飲んでいるということに気付いたお客さんに声をかけられて、ドラマのように「あちらのお客様から」とマスターがお酒をくれたのです。可愛い女性だったらよかったのですが、ひげを生やしたおじいちゃんでした。でも「こっちに来て、飲みなよ。寂しそうにしているか

らさ」と言われ、お話を聞いてもらったのです。いつもは話を聞く立場ですが、そういうことも楽しいなと思いました。一人でウロウロしていると、そういうこともあるのです。いろいろな話を聞いてもらって、実は今でも交流を続けています。そのイブに出会ったことをきっかけにして、仲良くしているのです。不思議なことがあるものだと思います。

なぜクリスマスを祝うのか

だからクリスマスに一人にいることは、悪くないのかなと思っています。むしろそうした只中にイエス・キリストがお生まれになったのだと思います。

大事なのは、クリスマスに家族や恋人といった大切な人と過ごすのは、なぜなのかということです。なぜクリスマスに祝うのかが重要であって、パーティーをすることが主題ではありません。では、なぜでしょうか。今日のイザヤ書の箇所では、ただ喜び勇んだ酒飲みの言い訳で、良い肉とえり抜きの酒が供されると書いてあるわけではないのです。イザヤ書25章の8節には、なぜ人びとが喜ぶかということが書いてあるのです。「死を永久に滅ぼしてください。主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい／御自分の民の恥を／地上からぬぐい去ってください」からです。救い主が人びとの悲しみを、この顔から、この思いからぬぐい去ってくださいから、そのために来てくださるからなのです。このことを経験した人は「その日には、人は言う。見よ、この方こそわたしたちの神。わたしたちは待ち望んでいた。この方がわたしたちを救ってください。この方こそわたしたちが待ち望んでいた主。その救いを祝って喜び躍ろう」。そして良い肉とえり抜きの酒で祝宴を開こうということになります。順序が大事です。パーティーをして「このパーティーなんだっけ？」ではないのです。なぜパーティーをするかと言えば、そこには私たちが喜びに満たされるという動機がある。救われたという根拠、実感をもってそこに集うからなのです。そう考えるならば、恋人同士で幸せになんとかなく過ごしている、そうしたところにはきっとイエスは生まれてこないと思います。幸せなところに、あえてイエスは来る必要がないのです。温かい部屋のおかげで、美しい雰囲気のおかげでキャロルを歌い、聖書の言葉に耳を傾けている。もしかしたらそんなところにもイエスはお生まれにならないのかもしれませんが。

イエスがお生まれになったとき、それはどんな場所であったか。馬小屋の中で、年端もいかないマリアが泊まる場所もなく、生まれたばかりの赤ん坊のイエスを飼い葉桶に寝かせるほかなかった。そうした状況の只中に、イエスは現れたのです。そう考えるならば、クリスマスに一人で寂しいと思っている人、寒さで眠れず路上に佇む人、明日の食事のため仕事を求めて並んでいる列の只中に、あるいは帰る家を失い、帰れるかも分からない原発事故の只中にある東北の被災者の上に、基地問題でうめいている沖縄の人びとや、武器を持って戦わされている世界各地の子どもたち、飢えに苦しんで明日をも知れない命、さまざまな痛みを抱えている人びとのところに、きっとイエスはお生まれになるのだと思います。救いを必要としているところにイエス・キリストは誕生されました。そして本当の救いをその言葉と行動で表されました。そのイエスの言葉と行動は、ぜひ聖書を読んでみてください。また、教会に足を運んで聞いてみてください。あるいはせっかく同志社にいますのでから、授業で聞いてみてください。そうした寂しさの只中にある人びとのところにイエスは生まれて、「大丈夫、あなたは一人ではない」というメッセージを語ってくださっているのが、クリスマスの本当の意義です。そしてこんな苦しい現実の只中に、なお神は私たちにそうした恵みの時、ほっこりあたたまるような出来事を与えてくださっていることに、喜びを感じて祝うのです。喜び躍るのです。祝宴を開くのです。そうした意義があります。12月24日には、一人でも恋人同士でもかまいません。キリスト教文化センターでもチャペル・アワーがその日にありますから、ぜひ足を運んでください。そうすれば、あなたは一人ではありません。余裕があれば、その後、町に繰り出してください。クリスマスに一人で寂しいな、と出会いを求めている人たちと出会い、そこから奇跡が生まれるかもしれません。そうした奇跡が起こるのが、クリスマスなのです。

さあパーティーの準備を始めよう！

神が私たちのもとに訪れ、すべての顔から涙をぬぐってください。そこに喜びと希望をおきたいと思います。そして本当の意味でクリスマスに祝うことができるように、その日アルバイトの人も意識を変えてみましょう。その日働くことによって、多くの人の幸せに寄与していると思えば、モチベーションも上がるでしょう。私も頑張ろうと思いました。人のために生きることはとても大事です。そこにきっと神の恵みがあって、何かいいことがあると思います。皆さんの心の中に涙するような出来事があったとしても、その涙をぬぐってくれる神がいてくださる。祈ってくださいの方が少なくとも一人はいることに、少し希望と安心感をもってくれればと思っています。そうした実感をもてば、本当の意味でクリスマスの時、私たちは、よりよいパーティーを開くことができると思います。うまい酒を飲み、うまい料理を心から楽しんで食べることができると思います。

今こそもう一度、この備えの時にあのパーティーを想像してこの言葉を読みたいと思います。「見よ、この方こそわたしたちの神。わたしたちは待ち望んでいた。この方がわたしたちを救ってください。この方こそわたしたちが待ち望んでいた主。その救いを祝って喜び躍ろう」。

皆さん、さあパーティーの準備を始めよう！